

DAITO
TL
シリーズ
COMICS



Mの鍵穴

Kou Natsuo

夏生 恒



Mの鍵穴

エム

エス

かき

かき

あな

Kou Natsuo

夏生 恒



エス かき
Sの鍵
エム かき あな
Mの鍵穴

—前編—



この人は
五十瀬公貴さん

イヤ？
嘘をつけ

ここをこんなに
濡らして



あっ
あっ



アッ
アッ

それとも
これでは
ものたりない
ということか？

アッ
アッ

恋人だったら
いいのにと
思ってる人です

私の…



私
百重風花

んっ



残念だが
今はここまでだ

そろそろ会場へ
もどらないと
君も困るだろう

.....



お願い

お願い
もう.....



すみません
遅くなりました

風花さんが
具合が悪そうでしたので…

風花が？
具合悪いの？

この人は
私の姉
百重直美です

少し：
人に酔った
みたいで…

僕も
いきれに
酔いそうに
なりますよ

まあ
公貴さんみたいな
慣れされた
方が？

バカなコね
いくらお父さまの
いいつけだからって

こんな場所に
のこのこ
でてくるからよ

あつ
公貴さん



ねえ
きみたか
公貴さん

父が
そろそろ結納の
日取りを
決めないとって
いってましたのよ

お父上も
お気の早い

あっっ

ウ//
ウ//
ウ//

…っっ

…っっ



こんな
とこで…っっ

…んっっ

どうしたの
風花

気分でも
悪いの？

…っ



きよ：：
着物
着慣れなくて…

かえ
帰ったほうが
いいんじゃない？

タクシーを
手配してもらいなさい



きよ
公貴さんが？

きよ
公貴さんの
おひろめも同然の
集まりですのに…

この子なら
大丈夫ですわ
ひとりで帰れます

ね？
風花

…

僕が
送って
いきましよう

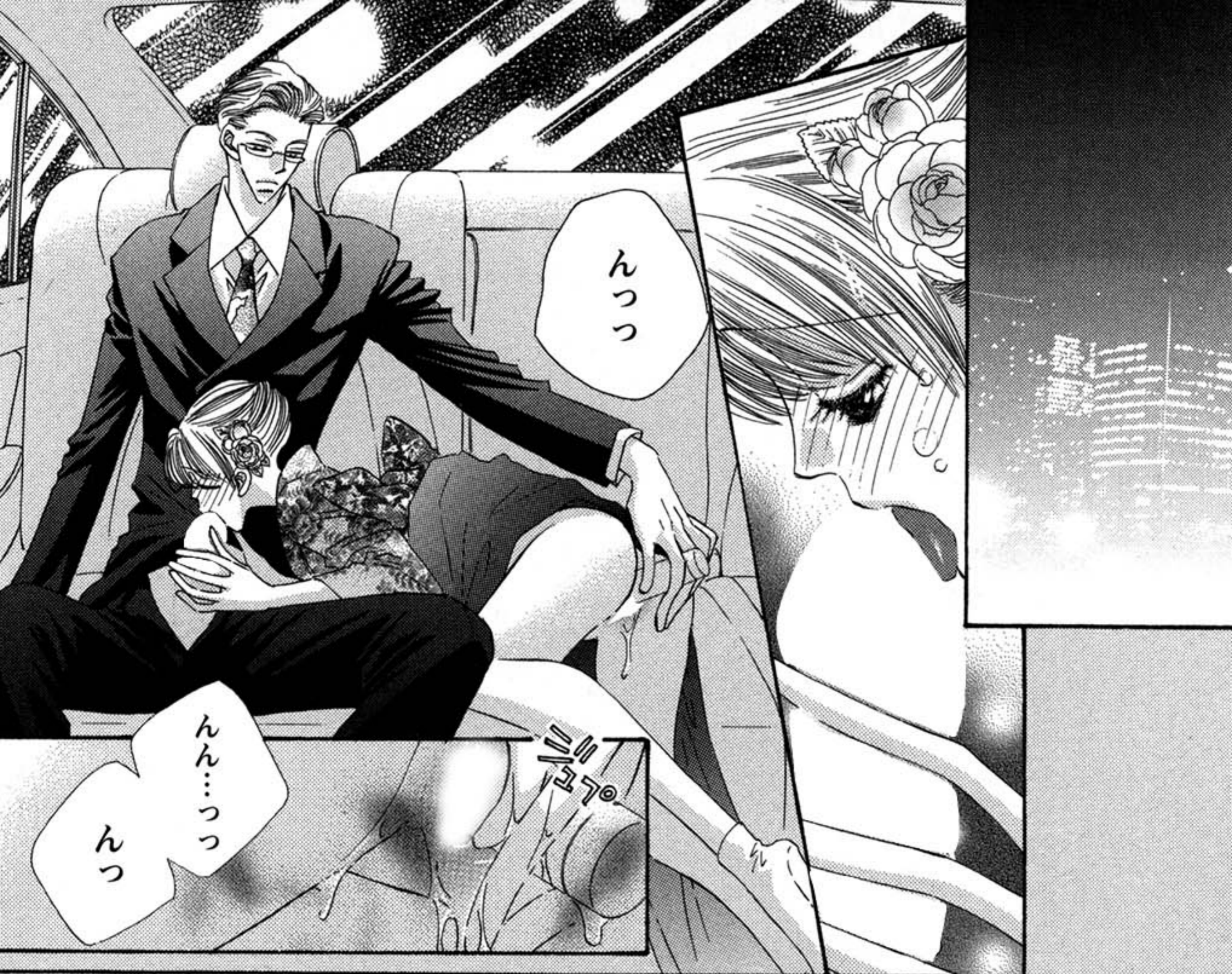


まあ
残念だわ

申しわけない
実はこれから
仕事が入って
いるんです

そのついでに
送って
きますよ

…



んっっ

んん…っっ
んっ

ニク
ニク



そんなにおいしそうに
美味しそうに
ほおばって
…これが
好きか？

んっ
んっ
ん…っっ
ん…っっ

こんなにグシヨグシヨにして、
襦袢じゅばんを汚したら
家の人いえひとに
どういわけ
するんだ？
ん？



またがれ

自分から
入れてみる

ひどい言葉で
なじられてるのに

気持ちもからだも
どんどん
昂ぶってしまう

節操のない
淫乱だな

おまえの姉の
夫になる
男のモノだぞ



ここ……
ここ……?

外からは
みえない

それとも
滝江が
気になるか?



みられていれば
よけいに感じるかも
しれんぞ

なにじろ
おまえは

いたぶられれば
いたぶられるほど

キユツ

アツ

アアツ

「感じる」
変態だからな

アアツ

ニユツ

ニユツ

ニユツ

ホラ
滝江に
みえているぞ

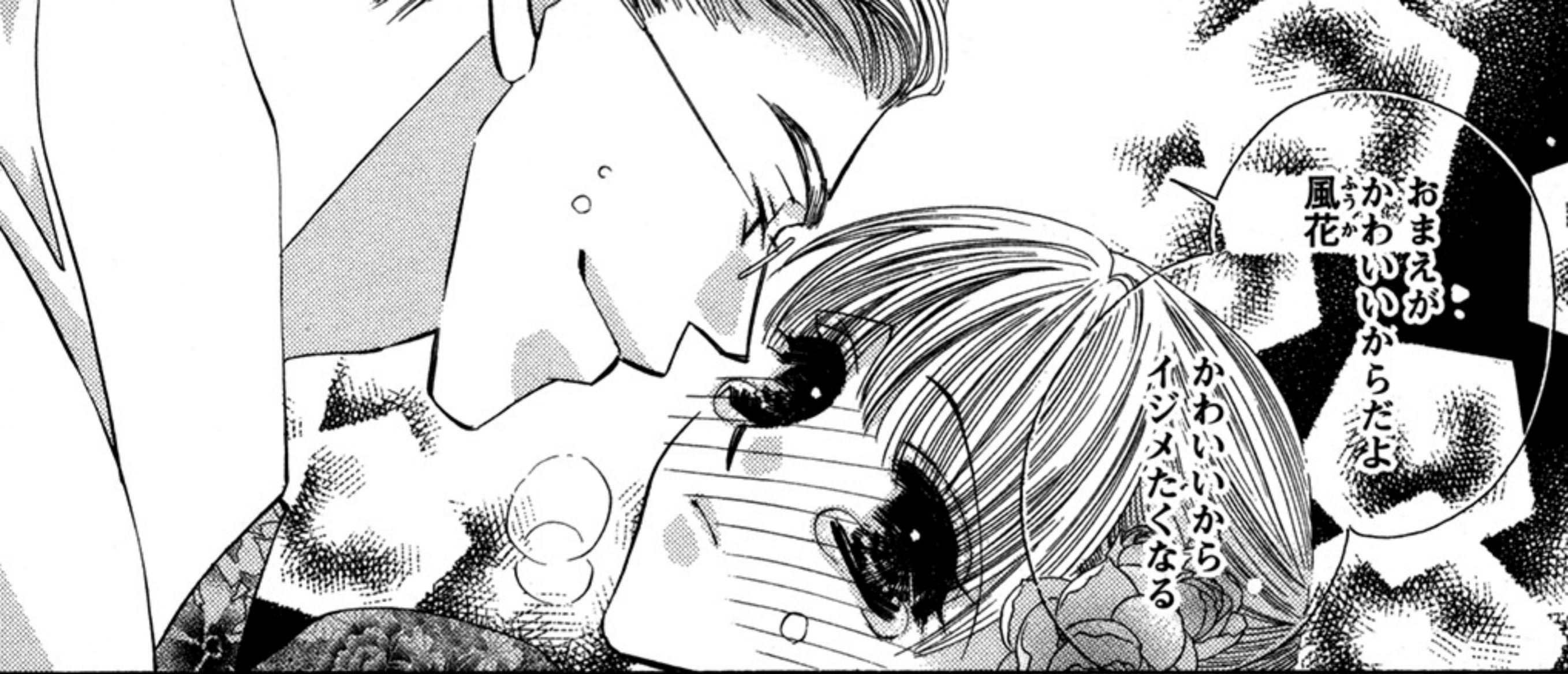
オレのモノを
のみこんでいる
ところが

やめて……つつ

こんなの
イヤです……つつ

どうして
こんな
ひどい……

アアツ



おまえが！
かわいいのからだよ
風花

かわいいから
イジメたくなる



ホントに？

そんな言葉
ひとつで

心とからだの芯に
あついなが
熱い炎が
とも
灯る…



はじめまして
五十瀬公貴
です



五十瀬さんと
はじめて会ったのは
2ヶ月まえ

姉の
お見合い相手として
紹介された…

五十瀬さんよ
ISEグループの
副社長を
していらっしゃるのよ



ターニング
ポイントは
突然のように
訪れた

風花ちゃん！



その圧倒的な
存在感と

深く鋭い瞳に
一瞬で
魅入られた…



いやあ
偶然とはいえ
きょうはよかった

風花ちゃんと
ゆっくり話して
みたいと
思っていたんだ

もしかしたら
義妹になるかも
しれないからね



あね
姉と結婚
するんですか？

じぶん
自分で
いつていて

むね
胸がちくちく
痛いセリフだったよ

うん
そうだね
おそらくは
そうなる
とおも
思うよ

うちの父と
君のお父上の
おもわく
思惑は
一致して
るしね

とぎ
都議をして
いる
うちの父は
せい
政界への
あし
足がかりを
ひつ
必要として
いるし

君の
お父上の
ものえ
百重代議士
は
うちの
グループ
企業
からの

たがく
多額の
せい
政治献金
を
ほし
がっている

せい
政略結婚
みたい
なもの
だから
ね

じぶん
自分で
どう
こう
いう
もん
問題
じゃ
ない
んだ
よ



結婚すれば
愛していない人でも
愛せるようになる
だろうか

めずらしい
ことじゃあない
よくある
ことだ

好きじゃ
ないのに
結婚するの？



…なんて瞳を
するんだ



君の気持は
わかっていた



そんな
ウサギのような
瞳で

会うたび
みつめられてはね



そのまま
私は
五十瀬さんの
ものになった

彼のすべてを
しりたかった

その唇や肌
吐息の熱さを

ゼロより
0距離で
感じたかった

お姉ちゃんの
結婚相手だけど
かまわなかった

たった一人きり
なっただけかも。